

## 最後の「ラ・マンチャの男」

上原 昇 (2組)

特別に歌舞伎のファンでなくても、俳優・松本白鸚 (九代目松本幸四郎、1942年生) のことは知っている人は多いと思う。4年前に幸四郎から二代目白鸚を襲名した彼は、歌舞伎の世界では名門「高麗屋」の総帥で今でも現役である。

筆者は歌舞伎の舞台もよく見ているが、白鸚といえば歌舞伎役者よりミュージカル俳優としての姿を思い浮かべてしまう。

特に、スペインの作家セルバンテスと遍歴の騎士ドン・キホーテの二役を演じて知られるミュージカル「ラ・マンチャの男」は彼の代表作である。“夢は稔り難く♪♪♪”で始まる主題歌“見果てぬ夢”を聴いて、心を揺さぶられたのは筆者だけではないと思う。

2月6日(日)に日生劇場(千代田区)で幕を開けた「ラ・マンチャの男」は彼が演ずるファイナルステージとなると言われている。自身「今年の八月に80歳を迎えますので、年齢的には、これが最後じゃないかと思っています」と語っている。

筆者は今回もチケットを予約して楽しみにしていた。結局、幕は開いたが、舞台関係者のコロナ感染で断続的な休演が続き、予定されていた23日間の公演は6日間だけの公演となり、終盤も21日から千穂楽の28日まで休演で終わってしまった。

結局、最後の「ラ・マンチャの男」を見られなかったことは大変残念であった。

さすがのドン・キホーテもコロナには勝てなかったとみえるが、今後コロナ収束後、(ひょっとしたら)前言を翻して再演することもあるかもしれない。

思えば20年以上前、2000年(平成12年)4月の日生劇場公演を偶々観る機会があり、それ以来、東京での「ラ・マンチャ」の舞台は欠かさず観ている。

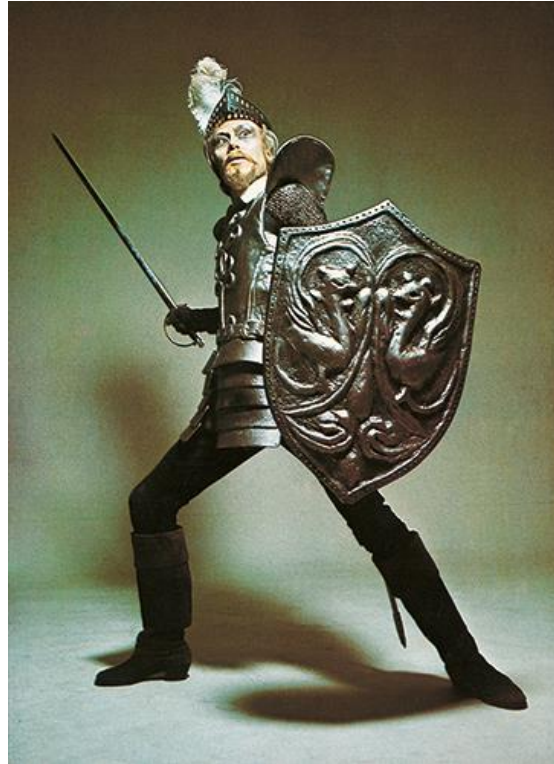
上演記録を見ると、初演は1969年(昭和44年)というから53年前に遡る。2019年の公演途中で通算1300回単独主演記録を達成している。

2015年(平成27年)9月には、まつもと市民芸術館で三日間の公演を行っている。全編2時間15分、それもほとんど出ずっぱりの熱演(熱唱)を1300回以上続けてきたのは、前例のない快挙である。

コロナ禍のなか、「苦しみを勇気に、悲しみを希望に変えるのがわれわれ俳優の仕事」と語る老雄(老優)に拍手(カーテンコール)を送りたい。

ただ、残念なのはこの役だけは、息子の幸四郎(十代)をはじめ継承が難しいことだ。あまりの偉業だけに引き継ぐ人は出てこないのではと思うし、白鸚とともに年齢を重ねてきたファンにとって他の人の主演では興味がわかないだろうから。

なお、この舞台には長野県(筑摩郡朝日村)出身の俳優、上條恒彦(1940年生、松本県ヶ丘高校OB、「出発の歌」で世界歌謡祭グランプリ受賞)が、1977年以来最近まで主要キャスト(牢名主兼宿屋の主人役)で出演していることを付け加えておきたい。



1969年4月（初演）公演プログラム掲載の市川染五郎（当時）〈撮影：篠山紀信〉



2012年8月、幸四郎（当時）、古希（70歳）の誕生日に1200回公演を迎える（帝劇）  
幸四郎の左は娘の松たか子、左端は上條恒彦

（2022年2月28日記）

以上